

はじめに

僕らが暮らすまちの商店街は、どんな風だったら、嬉しいだろう。

2019年12月7日、長野県辰野町でトビチ marketが開催された。

21の空き店舗・空き家を使ったマーケット。

県内外から54店舗のお店が集まった。

町内外から4000人を超える人たちが冬の辰野町を訪れてくれた。

商店街に人が歩いている。それだけで嬉しい。

それだけで涙が出そうになる。

メンバーの何人かは泣いていたし、メンバーの何人かは笑っていた。

トビチ marketは、「10年後の1日を」がコンセプト。

まちは人だから、人が動けば、まちも動く。少しずつ少しずつ。

僕らが暮らすまちが、「みんなが生きやすいまち」だったら最高だ。

10年後にそうなっていることを目指して、前向きに。

トビチ market 共催（主管）
一般社団法人〇と編集社 奥田悠史

トビチ market アーカイブブック

目次

はじめに	2
「トビチ商店街」 奥田悠史	2
10年後の1日を、「トビチ market」	4
トビチ market までの道のり	6
偶然を必然に編集する 赤羽孝太	12
ジンコのトビチ制作フォト日記 中林仁子	16
資料（ポスター、当日マップ）	20
出店者一覧	22
トークゲスト寄稿	26
磯木 淳寛	
藤本智士	
植原正太郎	

30	対談1	
	辰野町長×靴のフジタヤ	
36	対談2	
	O to & × en-shouten	
42	原田技研	
44	ダスキント竜	
46	当日スナップ	
58	古民家ゆいまゝる／農家民宿	月のもり
	アトリエ和音／古家民宿	おおたき
60	ボヘミアン珈琲	渡邊比呂
62	トビチ market サポーター	
64	「未来は過去さえもつくる」を体感した1日	山下実紗
66	おわりに	
	special thanks	

トビチ商店街

一般社団法人〇と編集社 奥田 悠史

トビチ商店街という、まちの再編集

老舗も新店舗も閉じたままの店舗もひっくるめて、地域としての「楽しい」をつくろう。

歩けないと不便だった時代があつて、当時、商店街はまちの商業の中心だった。それから地方は、みるみる車社会になって「駐車場がないと不便」というのが地方の当たり前に変わった。

そうすると、少し離れた広い場所に大型のショッピングモールができ、モールの中に新しいまちができた。とても便利だ。大型モールへの変化は地域の文化の変遷なんだろうと思う。

じゃあこれからの僕らのまちの商店街をどうしよう、と考える。大切なのは、きつとこれからのこと。昔の商店街を取り戻すっていう話ではない。あるいは、大型ショッピングモールのせいにする訳でもない。

どんな商店街が自分の街にあつたら嬉しいか、を考えることが大切だ。商店街はたくさんさんの機能を持っている。昔の商店街もきつとそうだったのだろう。町のコミュニティの場所であり、買い物する場所であり、働く場所だったはずだ。子ども達は、商店主に見送られながら学校に行き、商店に寄り道をして帰る。

僕たちは商店街やこのまちに残る「小さな宝物」みたいな文化とか文脈なんかを活かしながら、次の商店街をつくりたい。商店街という地域も考え方も拡張してもう少し広く捉えようと思う。歩いてもいいけれど、自転車で巡ると楽しいくらいの経済圏。

飛び飛びの商店をつないで、新たな価値観で商店街をつくる。商店街をショッピングストリートとしてではなく、場所を拡張しながらそのまちのコミュニティ空間として再定義していく。

それを僕らは「トビチ商店街」と名付ける。

2030年、このまちの未来

大切なのは、「このまちにどんな未来をつくりたいか」ということだ。

今から10年後、2030年の辰野町はどんな「まち」になっているだろうか。

僕らが目指すのは、多様な人たち（日本人も外国人も旅行者もビジネスマンも地元の人）も初めての人も、大人も子供も）がこのまちを歩いたり、自転車で行き交ったりする未来を想像したい。様々な価値観が許される多様な文化が生まれるまちにしたい。その方が、いろんな人にとって生きやすい「まち」だと思うからだ。

もちろん誰かを傷つけたりする価値観が許されるということではない。

例えば、B級なんかで地元の人と旅行者やビジネスマンが話をする。

盛り上がりつつ、「一緒に焚き火でしようぜ」、という話になったりする。田舎だからこその「まちづくり」がある。アウトドアフィールドが近く、空き店舗や空き家といったリソースがたくさんある。そこに仕事や遊びや文化が融合すればきっと面白い。

多様性を認めるためには、多様性に出会う必要がある。多様な価値観や文化が混じり合うことで、人々は調和していくことができる、と思う。同じ文化、同じ背景の人たちだけで話していると、どんどん主語だけで話を通じるようになる。日本はハイコンテクストな社会と言われてい

る。つまりは空気を読む文化だ。有言実行より、不言実行が美徳とされる。しかし、それは文化が同じ社会じゃないと通用しない。そういう社会は、文化が違う人を無意識に弾いてしまう。「あいつは話

が通じない」と言われたり、「自分の趣味は変なのかもしれない」と自分で自分のことが信じられなくなったりする。

全く違う文化・文脈を持った人が集まるからこそ、そこにある見えなかった文化が言語化される。それが大切だ。そして、様々な「好き」が集まることでまちは多様になり、寛容になる。文化は多様な方が、いろんな人が生きやすい。いろんな人が生きやすいまちがいいと思う。子どもも大人も、自分の好きなことを好きだと叫べるまちを目指そう。

そのために

そのためには商店街が必要だ。サテライトオフィスや新しい会社、ものづくりやバーやパン屋さんやごはん屋さん、服屋さんに自転車屋さん。宿もあった方がいいし、キャンプ用品店なんかもあるといい。

商店街で商業を回していく。地域からいかにサステナブルな経済を作っていくか。地域だからこそできるビジネスがある。地域にしかできないビジネスもある。

日本の地域が抱える課題は世界が抱える地域の課題になっていく。少子高齢化、人口減少最先端の日本の地方を考えることは世界を考える上でもとても大切だ。

地域はリソースが余ってくる。空き店舗や空き家もそうだし、土地や農地もそう。開発とは違うスキームで持続可能な暮らしを作るにはどうしたらいいか。自分たちの次の世代にどんな未来を残していくか。小さな商店街づくりから考えていく。

トビチ商店街はその旗印。

僕らが目指すのは、持続可能で、いろんな人が生きやすい優しいまちづくり、だ。

トビチ
.....
商店街

トビチ
.....
Market

トビチ商店街とトビチマーケットのロゴマーク。
「トビチ」の文字は、町の道路をあらわし、白と黒の□は空き店舗と営業店舗をイメージしている。

10年後の1日を、「トビチ market」

奥田悠史

トビチ market は、「トビチ商店街の10年後の1日をちよつと貸してよ」というのがコンセプトのマーケットだ。

辰野町の空き店舗が、ワクワクするお店に変わる一日限定のマーケット。飲食店や雑貨屋、本屋にクラフト作家。この町の未来がこんな風だったら面白い、をみんなで作るためのイベント。

ワンデ이의マーケットやマルシェといえば、広場や公園なんかにお店がぎっしり並んでいるのが一般的。だけど、トビチ market は、町の空き店舗を利用するので、店舗と店舗の間が離れている。

辰野駅からまっすぐ800m、下辰野商店街とその周辺の空き店舗をお借りして開催。お店とお店の間には、既存店もあり、シャッターが閉じているお店もある。店舗と店舗の、その余白みたいな空間も一緒に楽しむマーケットだ。

一箇所にたくさんの人が集まるのではなく、まちのいろんなところに人が歩いている。そんな風景を作ろう。

「このまちの未来がこんな風だったらワクワクしませんか。」というのを言葉で伝えるのはとっても難しい。特に、たくさんの人たちと共有するのはさらに難しい。それなら、目指す未来の1日をみんなで一緒に体験して、共有することができればきっと、もっと伝わる。だからトビチ market は、まちの未来を考えるためのプレゼンテーションだったのかもしれない。

僕らは未来の辰野町がどんな風だったら楽しいかを考えて、トビチ商店街という旗印を立てた。そこに込めたのは、みんなが生きやすい町、



辰野駅付近から見る現在の商店街

ということ。多様性があつて、様々な文化に対して寛容であるまちだったらいなと思う。

だから、「商店街活性化！」というのとは少し違う、と思つてゐる。だけれど、今回のマーケットでやったことは空き店舗を資源として捉え直して、そこにいろんなお店が入っているワンデーマーケット。

それは、「端からみれば「商店街活性化」、「空き店舗活用」ということと変わらないのかもしれない。方法は似ているけれど、目的が少し違う。

まちの未来がどんな風だったら良いか、を考えてその未来をつくるためには、商店街がこんな風だったら、むしろ商店街という枠組みを外して広いエリアでこんな風だったら楽しい、から考える。

商店街のシャッターをこじ開けることが目的ではない。閉じたままのシャッターがあつてもいい。昔から続く商店もこのまちの宝物だ。このまちに生まれる新しい何かが、次のまちを形作っていく。

多様性とか、多様な文化への寛容性。

「できない」を「できる」に変えていく。

「不安」を「希望」に変えていく。

「現在」を「未来」に変えていく。

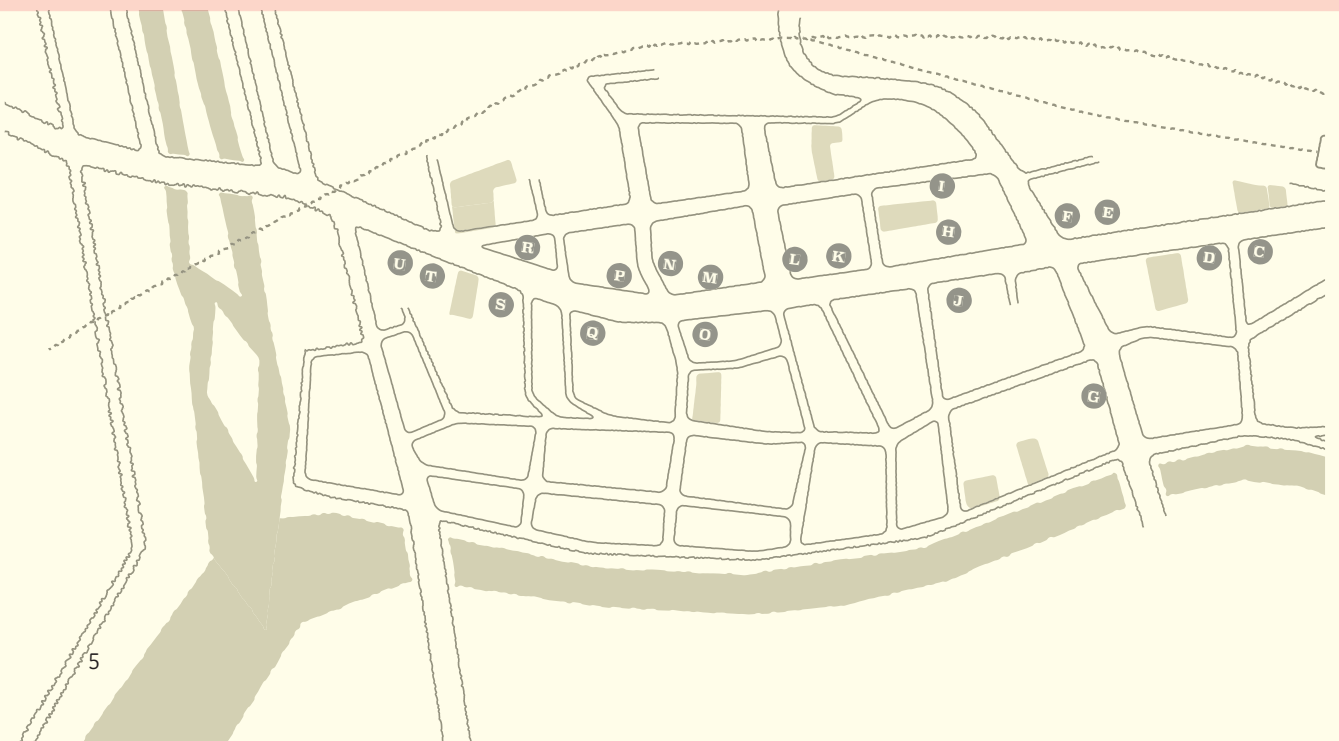
「生きにくさ」を「生きやすさ」に変えていく。

「やりたい」を「やってみる」に変えていく。

トビチ market は、そういう挑戦だ。はじまったばかり。

2019年12月7日。むしろ、ここがスタート地点。

次の12月7日は何が起こるだろう。



トビチ market までの道のり

一般社団法人〇と編集社 山下実紗

2019年

● 8月16日 (金) トビチ第1回全体ミーティング、出店者選定開始

● 9月14日 (土) Good Local Bar さゝ家グランドオープン

● 9月30日 (月) 自転車でまちめぐり第1回

● 10月5日 (土) 自転車でまちめぐり第2回

● 10月10日 (木) マンジャーナル対談イベント「商店街を面白がる」

● 10月25日 (金) クラウドファンディング開始

● 10月26日 (土) フライヤーデザイン完成

● 11月4日 (月) 自転車でまちめぐり第3回

活動を加速させるために
80万円を目標にCAMPFIREで
クラファン開始！

最初の人数は、10人
くらい。自分たちが
10年後のまちに欲しい
お店を出し合う。

五味ひづるさん・奥田悠
史さんデザインの、正
方形のフライヤーが完成。

自転車で回れる距離がト
ビチ商店街。それを体感
してもらうために、3回
のまちめぐりを企画。

代表 赤羽、毎晩夜なべ
で、現場作業。トビチ商
店街の2店舗目(1店舗目
は、STUDIO リバー)で
ある、さゝ家がオープン。

NPO 法人匠の町しもすわあきないプロジェクト
の原さん × 〇と編集社代表 赤羽。
10年前から、下諏訪でワクワクする商店街のプ
ロジェクトを始められている、原さんと、〇と編
集社代表 赤羽の対談。

夜中にインフォメーションとなる空き店舗のトイレが詰まる。

代表赤羽が徹夜で修理。

(有) 原田技研さんとサポーターのご協力をいただき、当日販売するトートバックを、シルクスクリーンで作成。

信州大学の「ボヘミアン珈琲」の学生を中心として、空き店舗に残っているモノの搬出と、壁塗りを行った。

● 12月7日(土) トビチマーケット

出展者54組！
準備から当日までサポートしてくれた方々約40名！

● 12月6日(金) クラウドファンディング92万円達成！

128名にご支援頂き、
80万円を超えて達成！
ありがとうございます!!

● 11月30日(土)・12月1日(日) 原田技研さんによるトートバック作成WS

トビチマーケット トークイベントの会場である角十。モノでいっぱいだった会場を「ボヘミアン珈琲」の学生がイベント化してくれ、2日で片付けを完了できた。地元の(有) 遠藤産業さんに、片付けのご支援をいただく。

● 11月23日(土)・24日(日) 角十片付けイベント

栗日菊地さん×赤羽のトークイベント

日中は元フィリピンパブの掃除。夜は「ボヘミアン珈琲」の学生が企画した、空き店舗の活用をテーマにしたトークイベントを開催した。

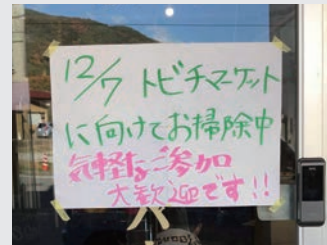
● 11月22日(金) キューティースター掃除&

空き店舗の窓ふきをイベント化した。途中からサポーターに加わっていただいた、ダスキン天竜さん直々の指導を受ける。

● 11月16日(土) 吉江プロパンの掃除&ブラザーの壁塗り

● 11月10日(日) ダスキン天竜さんと、商店街の空き店舗の窓ふきイベント

当日までの 準備風景









偶然を必然に編集する

一般社団法人○と編集社 赤羽 孝太

「こと」との出会い

僕が上京してから地元ローカルとまた関わり始めたきっかけは、2013年夏、叔父からの一本の電話でした。話によると町に空き家が500件以上あるらしく、今後ますます増えていくことが予想され、それを何とかするため官民協議会が立ち上がるらしいという話でした。

進学をきっかけに首都圏の大学・大学院に進み、社会人になってからは、大学助手・大工・設計事務所と進みました。高校を卒業して13年、地元辰野町に帰省するのは、お盆と正月に2〜3日くらいでした。昔からよく高速バスを使って帰省していて、新宿を出発して3時間、諏訪湖を過ぎて伊那谷が見えてくると「あゝ帰ってきたなあと」という感じですよ。

初めからこの町に対して特別な思いがあったわけではありませんが、毎回帰省する度に、あっちのお店が閉じ、こっちのお店が閉じ、と町の人氣がなくなり、何となく活気がなくなってきた寂しい現実、心の片隅に積み上げられてきたんだろうと思います。子供の頃は、スポーツ用品店で初めてのグローブとバットを買ってもらい、靴屋さんで空の靴箱をいっぱいもらって工作して（もちろん靴も買ってもらいました）、おもちゃ屋さんでファミコンソフトのマリオブラザーズ3を貯めたお年玉で買った、洋服屋さんの初売りで夜中から並んで買った初めてのLevi's 501など、商店街をはじめとして町の中には楽しいたくさん

思い出がありました。

設計事務所で建築の仕事をしている僕は、空き家の話なら何かできるかもしれないと思い、「辰野町移住定住促進協議会」の立ち上げ時から参加したのが、ターニングポイントとなりました。協議会というのは、官も加わった会で、大抵の場合は平日に開催されることが多く、サラリーマンではなかなか参加すらできません。そのため、独立して社長（個人事業主）になれば、仕事や休みを自分で調整できるからと、2014年4月に独立起業。2年間はお盆と正月以外も東京から帰省して協議会に参加していました。

いま振り返ると当初は、町のこと、行政のこと、町の現実のこと全てが分からず、遠方からこうしたいいい、ああしたいいい、という無責任なアイディアマンでしかなく、そのアイディアが実現しなかった理由がよくわかります。今でもそうですが、体験的に確信を得たことは、ローカル（地域）には圧倒的に実働部隊（プレイヤー）がいないという事実です。

「ひと」との出会い

2015年夏、蒸し暑い夏より熱い一人の人との出会いがありました。こんな熱い人と一緒なら本当に何かできるかもしれないと、僕の背中を強く押し、東京の事務所をたたんで、16年ぶりに地元ローカルに拠点をかまえる決断をさせてくれました。ちなみに僕はこの熱い人を「始まりの人」と呼ばせてもらっています。（笑）



トビチmarket当日のSTUDIO リバー 2階。
机の上の混乱ぶりが、イベント準備のテンヤワンヤを
物語っています。

2016年春に拠点を辰野町に移して、首都圏との二地域暮らしをしながら活動を始めました。始めは、「始まりの人」と当時地域おこし協力隊だった「通称・タメちゃん（現弊社監事）」の3人で。毎日、コッコツと地域を周り、人とながら、空き家オーナーと話をし、移住希望者や興味を持ってくれた人に対し、オーダーメイドで対応する。もちろん、仕組みや制度をつくり、整えるということは絶対に必要ですが、それをどのように運営していくかは、やはり人に依存します。

建物には大小はありますが、それぞれが何かを抱えていて空き家となつていきます。その何かを一つ一つ読み解き、大切に使用してくれる新たな人に繋がります。丁寧で泥臭く、またすぐアナログな作業は、結果とし

て課題解決に最短距離でつながることを学びました。始まりの人、1人で始まり、僕とタメちゃんが加わり、3人へ。丁寧につないで輪に加わってくれる人が1人また1人と10人へ。10人の人がまた新しい人を繋げて30人へ。

トビチ商店街という構想はもとも温めていましたが、トビチマーケットも一夜にして出てきた話ではありません。商店街をフィールドに2ヶ月に1度まちあるきをして、内見させてもらえる空き店舗を数件見る取り組みは、3年にわたり、17回開催しています。それを経て、少しずつ地域の方や土地のオーナーさんと知り合いになり、内見させてもらえる建物が増えて、様々な情報を蓄積してきたという、表にはあまり見えない3年間の仕込みがありました。

「ひと」がつながり「何かをなすチーム」をつくること

トビチマーケットではいくつかの決まりがありましたが、それ以外は基本的に各担当が主体的に動いて決定をして話を進めています。

1) 情報共有・PRは積極的に行うが、
人的・資金的な依頼は行わない。

・ 後援の依頼は情報共有・PRという点でより多くの団体へ依頼をさせていただきます。

・ 運営資金に関しては、地元企業や商店に協賛は一切行わず、長野県のプロポーザルに応募し採択された委託費を原資としました。

ほかクラウドファンディングの実施、行政に共催となってもらうことで、消耗品や原材料と言った物品提供という形での支援と、

多少の出店費及び弊社自己資金で行なっています。

2) ビジョンとコンセプトを共有・共感して、

一緒にやりたいと言っていた方には、

得意なタスクを無理のない範囲で担当してもらう。

・ ビジョン… 10年後の今より少しワクワクする商店街（暮らし）

・ コンセプト… 10年後のワクワクする日常を想像ではなく、体験を通して
より多くの人と共有すること

・ 100あるタスクを1つでもやってもらえたらありがたいという考え方
（残った99のタスクはやりたいと言い始めた中心的なメンバーが行う。）

3) 出店依頼店舗は、本当に素敵だなあと言えるお店で、
どこかで実店舗を構えていること。

・ コンセプトにあるように、イベントを行いたいのではなく日常をつくり
たいので、イベントという非日常のみの営業ではなく、今もどこかで地
域に対して価値を提供しているということ。

・ 地元を優先するのではなく、本当に素敵だなあと言えることが絶対必要
条件。

（人員と資金の依頼をしないことと資金の調達を僕たち自身で行ったこと
が重要。共有された情報をもとに便乗をしてくれることは大歓迎。

便乗に関しては責任を持たないし、管理・干渉もなしの自己責任）

4) 10年後の日常で絶対あり得ないことは行わない。

・ 歩道での露店や臨時トイレの設置、歩行者天国など。

5) 必ずやり抜くこと

8月上旬に長野県の「商店街魅力づくり応援事業プロポーザル」に採
択されてから、4ヶ月という短時間で、全21会場（空き店舗10ヶ所、空
き地4ヶ所、近年開店した既存連動店5ヶ所、計画中2ヶ所）、54出店
者というスケールで開催できたことは、5つの決まりをそれぞれの立場

で主体的に考え、実際に行動してくれたという、沢山の「ありがとう」
の積み重ねの結果だと思います。

いろいろな関わりしろがあり、関わり方がある

いろいろな人がいて、いろいろな思いや場所がある

強制ではなく、たくさんさんの許容と共有と共感がある

そんな10年後のトビチ商店街の普通の1日「トビチマーケット」の記
録をここに。



夏に1ヶ月間〇と編集者ヘインターンに来てくれた立教大学の渡辺理恵さんと増田萌花さんにより作成！現状の商店街をリサーチし、丁寧にインタビューして回ってくれたこそ、そこで生まれたご縁もありました！



ジンコのトビチ制作フォト日記

中林仁子

(一般社団法人〇と編集社 ちょっと未来の研究所 所長／4 F A一級建築士事務所 共同主宰)

トビチマーケットの準備から開催日まで、会場レイアウトや出店ブッキング等の調整から、サイン看板、スタンプ等の小物まで多岐に渡る制作を、山下実紗氏と併走して担当。その制作時エピソードのほんの一部を抜粋。

※文中のmtgは「ミーティング」、トビチMは「トビチマーケット」、LCは「レーザーカッター」の略称です。

8/16 Fri. 18:00~@STUDIO リバー

記念すべき第1回mtg。奥田氏からプロポーザル提案の概要説明。計3回の自転車まちめぐりを開催した後に、12月7日のトビチMでは「10年後、こうなりたい商店街を一日だけ再現する」。ロゴがお披露目され、プロジェクトマネージャーは実紗氏であることが発表。後半は、まちめぐりチームとマーケットチームに分かれてワーキング。10年後にどういうまちになってほしいか、アイデアを出し合った。



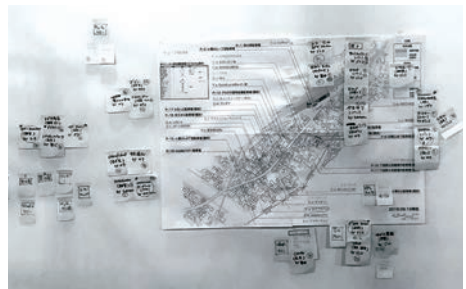
8/18 Sun. 7:00~@SHOZO ストリート

竹入自動車にてハイエースロングを借り、辰野を出発し目指すは那須塩原・SHOZO ストリートへ。トビチMのモデルとなりそうな場所への視察旅行をした。メンバーたちは店舗の飛び飛びの面白さ、めぐる楽しみを体感してくれた。ここで実感したことはメンバー間の共通言語になりそうだ。



8/30 Fri. 17:00~

リバーにて、第2回マーケットチームmtg。壁に会場マップを貼り、付箋に候補のお店を書き出して、マッチングさせてみた。会場となる場所の把握と同時に考えなくてはいけないのは、どういうお店が来てほしいか。1会場=1店舗ではなく1会場に2~3店舗がひしめいている、など、同じ会場の店舗同士も化学変化が起きたり、にぎわいが創出できそう！



9/19 Thu. 10:00~@下辰野商店街内

8月最終週から会場の空き家・空き地・駐車場など現調をはじめている。今日は現調3回目でインターン・モユミンが加わり、吉江プロパンの実測を開始。さすがは建築学生。実測がサクサク進む。期待大！図起こしなどデータまとめも早速モユミンにお願いした。モユミンの他、立教ガールズのインターン生には、既存店のインタビューをしてもらった。





10/5 Sat.-6 Sun. @さゝ家

9/14の「山と海ごはん」につづくイベント第2弾「旅するMargaret」開催。〇&メンバーの福澤氏のご縁で、京都のMargaretとポップアップショップ&カフェを協働開催。トビチM前に様子見も兼ねて。商店街に新しい風をふかした感触を残しながら大盛況に終わった！準備から翌日打上げまで、関わった方に後々、トビチMに出店いただくことになる…！



10/10 Thu. AM@さゝ家、夕方@ふらっと木曽

AM、対談イベント「商店街を面白がる」が公開で催され、〇と喫茶室を臨時オープンした。まちを変えるためには、可視化する事の大切さに深くうなづけた。いまやっている事に対して、背中を押してもらえたようだった。夕方からは木曽福島にてen-shoutenのトークイベントに参加し、トビチMに出店依頼。ぜひ！と二つ返事で、目を輝かせて想いに賛同して下さった。



10/15 Tue. 6:30~

クラファン用に運営メンバーの写真撮影を行った。メンバーとしばし商店街を歩き、商店街を歩く人をひとりでも多くしたいな、という想いをトビチM前に体现できた実感があつた。和音トモちゃんの有機野菜の混ぜおにぎりも配給した。トビチMでは野菜も売る場所を作りたいな。午後は会場候補も撮影した。会場だけでなく、商店街の様子もクラファンを通して伝える事ができたらと思った。



10/26 Sat. 15:30~@下辰野商店街内

第2回駐車場現調。今日は田村夫妻にも参加してもらった。今日は歩きながら、駐車場サインの設置場所の確認も出来た。田村さんからのアドバイスによると、砂利駐は大きめの石を除いた方がよいとのこと。停車するのにガタンガタンと車体をいためてしまうので、当日近くなってから、ライン引きのタイミングと合わせて砂利拾いをしようという話になった。



11/01 Fri. @STUDIOリバー

昨日から今日にかけて、チラシ、フライヤーが届いている！出店者も記載されるので、急に現実味を帯びて来よう。ワクワクしてきた！PRチームを主導に動いてもらっている配布先に早速郵送&手渡しを開始した。メンバーも増えて来たので人海戦術にて行った。特に、通常業務で営業をされているメンバーにはより多くの方に、より遠い所へ、「想い」を届けてもらった。

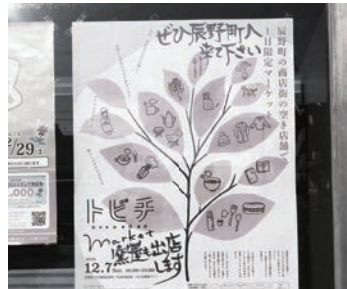
11/07 Thu. 20:00~@STUDIO リバー1F

孝太 & 金井ペアで、先週からLCの組み立て作業が始動。今日も夜な夜な作業。マシンはDIYで所要時間48時間とのことだが、まるで終わりが見えない…。そして設置したら動かせない。LCでは、看板とスタンプラリー用のスタンプが製作予定だ。初めてのマシンなので、時間がかかりそう。できれば余裕を持ってスタートしたい。ドキドキだ…。



11/15 Fri. Facebookにて

実紗氏から嬉しい写真が届いた。出店者の一組である箕輪町のパン茶房窯屋さんに、掲示のお願いをしたポスターに手描きのメッセージを添えていただいていたのだ…。10月から企画書を持って、趣旨と出店のお願いをして廻っていた。どの方も趣旨を面白がっていただき快諾くださった。実店舗を持っている方には成り立ちなどをインタビューし、お互いに理解を深め合う事ができた。



11/18 Mon. 17:00~@STUDIO リバー1F

協力隊の泰ちゃんと出店打合せ。泰ちゃんは無農薬野菜も栽培しており、川島地区の一部で販売もしているのだが、街中にも欲しいとお願いして出店いただくことになった。これからの泰ちゃんの働き方など未来を見据えながら、移動型無人販売車での出店に決まった。早速リバーにあるもので即席で作ってみた。トビチM当日はもう少しブラッシュアップさせよう。



11/27 Wed. @STUDIO リバー3F

1FでO'JAYS GOGOのポップアップイベントが開催された。トビチM直前イベントだ。1Fが使えないので、レーザーカッターでの本番刻印まであと少しだが、今日のLC作業は中止にした。看板は、表面はレーザー刻印、裏面は黑板仕様でお店情報をチョークで描く予定だ。黑板側には共通でロゴをカッティングシートするため、今日は3Fでシート作業を一気に終えた。



11/28 Thu. @STUDIO リバー1F

今日から看板の本番刻印が始まった。1Fも会場予定だが、出店者準備で4日中に終えなくては…。会場と駐車場看板は43枚作成予定。看板表面のレーザー刻印の所要時間は1時間/枚、その後はスタンプ制作も…。時間が無い！やるしかない！隣では、「ファッションはアートか？」と議論しながら、会場内に数ヶ所設置予定のリバーボックスのために本の分類仕分けが始まっていた。





12/01 Sun. 19:00～@メトロスポーツ

4FAスタッフの齋藤君と建築WS会場を掃除し、什器をレイアウトした。他の会場は11月前半にはほぼ固まっていたが、先週、日頃の準備を見てくださっていたオーナーさんから急遽声かけいただき貸していただくこととなったのだ…！前を通りかかったフルーティストの赤羽泉美ちゃんから差し入れと奇妙な巷の噂を聞いた。「まちのおばさまたちが、チケットを首からぶら下げて参加するらしいよ」…!?噂がねじれて面白い！



12/02 Mon. @STUDIO リバー

昨夜やっと看板のレーザー刻印が終わり、朝からスタンプ制作。試作を繰り返し夕方やっとひとつめが出来上がった。相変わらず、データの作り方に手間がかかってしまう。しかし、LCのハンドリングがまだ掴めていないので、データ作成の時間はかかるが一旦この方法で落ち着かせることとして、明日から残りの20個の制作に取りかろう…。夜は、まちのゲストハウス衆に夕食の差し入れをいただきながら、トビチM前最後のmtg。



12/05 Thu. @STUDIO リバー3F

明け方なんとかスタンプのLC作業を終えられた。看板DIYからフラッグ取付け、缶バッチ制作まで細々した作業を洗い出しては、手を挙げてもらったサポーターに指示を飛ばしまくった。看板はリバーでのLC作業の裏で裏面の黒板塗装をしてくれていた。今日は一気に組み上がった。齋藤君にはスタンプの持ち手制作から看板の蝶番詳細検討まで助けてもらった。わかめ氏には毎日楽しいと言われた。みんなに多謝！



12/06 Fri. @STUDIO リバー3F

もう頭が回らなくなって来た。昨夜仕上がった看板に、朝からひづちゃんにチョークで出店者を入れてもらった。アイディアだけだったトビチアーカイブライブラリーに着手した。これまでの準備をパネル展示したい。タナカではダスキン・田中お父さんが急遽換気扇を付けてくれた。仕上がっていく中、夕方になり、メトロのトイレが壊れていたと残念なお知らせもあった。とにかくライブ感満載！



当日 **12/07 Sat.** @下辰野商店街内

1:00実紗氏たちと会場全体を見回り、決定的に足りない事をリストアップ&トイレマークなどをシート張り。不明だった孝太氏は角13階で壁にペンキ塗りをしていた。リバーに戻り3Fで30分仮眠するも、2Fで実紗氏が感極まって泣いている…あと数時間…。7:30朝礼時に早朝孝太氏からメトロのトイレが直されたことが発表。また予定に無かったロゴ入りのサコッシュが配られ、中にはお小遣いが…不思議がたくさん！気がついたらもう夜。空には冬のほたるの花火があがっていた。



△ポスター

◁当日マップ

MAP

12.7 Sat.
10:00~15:00

トビチ市場

● 飲食・菓子・農産物など ● トイレ
● 日用品・雑貨など ● 授乳・おむつ替え
● ワークショップ・体験 ● イベントスペース

Info: インフォメーション ● B・R

📍 空き店舗・空き地 📍 未決の営業店舗??
📍 現在営業店舗

H 角十 PI [Talk event]

- パン茶房家屋 パン(筑前町)
- ドイツパンと菓子の店ビオランド パン(山形町)
- osanji 焼き菓子(東京都)
- こはなや あにぎり(筑前町)
- リバーブックス 貸本(筑前町)
- 楽楽堂 雑貨/ワークショップ(伊勢市)
- トビチアーカイブライブラリー
- トークイベント (計画未定)
- ① 10:30~12:00 磯木敦寛さん・植原正太郎さん
- ② 13:00~14:00 藤本智士さん
- ボヘミアン珈琲 コーヒー(松本市)
- 絵本読み聞かせ(無料) 14:00頃~(予定)

I 2 GoodLocalBarさくら家 PI

- 今古今と日食堂 和食/バル(神奈川県)

J 2 サン・スペース白木屋 PI

- ROOM CHICORA 美容雑貨(筑前町)
- りすなお店 雑貨(兵庫県)
- Margaret アクセサリー雑貨(京都府)
- toya アクセサリー雑貨(京都府)
- VANASPATI khadi haat kaam 服飾雑貨(京都府)
- 村田木工所 小物/家具(京都府)

E 2 まちのキッチン おかつて

- ゆがふ農園 有機野菜(筑前町)
- 月夜野こまもの店 お豆腐・味噌のクラフト(筑前町)
- お茶屋いちえ 日本茶(伊勢市)

F 2 @OHSUMIYA

- ラメゾン グルマンディーズ feat 役場有志 ぎたらう家造(筑前町)
- 工房めくもり うどん/ラーメン(筑前町)

L 2 アジタヤ since 2019 PI

- 甘酒屋 an's 甘酒(筑前町)
- パーガーなめた パーガー(筑前町)
- LOCOMO 仮眠服(松本市)

M 2 京屋

- ソーシャルバー PORTO バー(東京都)
- トビチアーカイブライブラリー

N 2 新栄堂

- カホン工房 CHAANY 楽器(岡谷市)
- 熱する古物箱 -hito.to- 古物雑貨(塩山市)

P 2 @FUJIMORI

- pizza santa rosa ナポリピザ(諏訪市)
- 移動販売トッキ カレー(筑前町)

R 2 メトロスポーツ PI [Info]

- 無印良品イオンモール松本 ワークショップ(松本市)
- 4fA 設計事務所ワークショップ(東京都)
- トビチアーカイブライブラリー

U 2 プラザエーシン

- CONTE 花屋(伊勢市)
- MADU アクセサリー雑貨(愛知県)
- monoto 焼き菓子(伊勢市)

Q 2 タナカ PI [PI]

- にっこり農園 パスタ/スープ(駒ヶ根市)
- こはるcoffee コーヒー(伊勢市)
- 森木屋 焼き菓子(伊勢市)
- おかめふとこ農場 パンケーキ(伊勢市)

S 2 吉江プロバン PI [PI]

- O'JAYS GO GO 衣類/雑貨(松本市)
- TRIP 家具(筑前町)
- SIDE by COFFEE コーヒー(駒ヶ根市)
- SOUP TRIP スープ(伊勢市)

B 2 CoffeeTop PI [Info]

- 無印良品 イオンモール松本 ワークショップ(松本市)

C 2 @ECHIGOYA

- Arisue SPICE エスニック料理(白馬村)

D 2 茶の間広場 PI

- FOOD TRUCK THE SEASON 多田料理(岡谷市)

G 2 げた屋 PI [PI]

- en-shouten 生食雑貨(本音町)
- おでサイクル -oh! good cycle!- レンタサイクル/カフェ/アフタヌーン(筑前町)
- pioneer plants 家具(伊勢市)
- HOA BINH TABLE サンドイッチ(三重県)

K 2 キューティースター PI

- No name ライフハウス/カフェアンドバー(筑前町)
- mons mare コーヒー(松田町)
- teenage cookers ネットランド/スープ(大原町)
- triangle 古着(長岡市)
- ウィンファクト takkiduda, オトシゴ, 三村大樹

O 2 さらだや

- ボン菓子ほんちゃん ボン菓子(筑前町)
- ロケットストアづくりワークショップ

12.7 Sat.

トークイベント

会場: **H**
旧「角十」3階

参加費: 各回 1,000円
(ボヘミアン珈琲による1杯のコーヒー付き)

定員: 各回 50名 (予約優先)

当日のチケット販売は下記3箇所にて
H: 旧角十3階受付カウンター
各インフォメーションカウンター
(B: CoffeeTop, R: メトロスポーツ)

1 10:30~12:00
“小さなまちで生きていく”

磯木 敦寛さん 植原 正太郎さん

「小高い」で自由にくらすの著者、磯木さんと NPO 法人 greenz の COO である植原さんに 小さなまちで生きていくことや持続可能なまちづくりについてお聞きします。

2 13:00~14:00
“まちを編集する”

藤本 智士さん

「魔法をかける編集」著者であり、秋田県発行「のんびり」の編集長、藤本智士さんに個人にも企業の人にも行政の人にも聞いて欲しい「編集」の話をお聞きします。

当日利用時間
9:30~17:00
Parking

駐車場内のトラブルは一切受け付けません。

tobichi.jp

共催 一般社団法人〇と編集社(主管)・辰野町 お問い合わせ revision@maruto.or.jp

21

A 古民家ゆいま〜る

古民家ゆいま〜る（辰野町）ゲストハウス見学会

B CoffeeTop

無印良品 イオンモール松本（松本市）ワークショップ

C @ECHIGOYA

Arisue SPICE（白馬村）エスニック料理

D 茶の間前広場

FOOD TRUCK THE SEASON（岡谷市）多国籍料理

E まちのキッチン おかって

ゆがふ農園（辰野町）有機野菜
月夜野こまもの店（辰野町）カラフル米粉のラップサンド
お茶屋いちえ（伊那市）日本茶

F @OHSUMIYA

ラメゾン グルマンディーズ（塩尻市）feat 役場有志 ギタろう軍鶏・カレー・鹿肉
工房ぬくもり（辰野町）うどん／ラーメン

G げた屋

en-shouten（木曽町）生活雑貨
おぐサイクル-oh! good cycle!!-（辰野町）レンタサイクル／スープとコーヒー
pioneer plants（伊那市）家具
HOA BINH TABLE（三重県）サンドイッチ

H 角十

パン茶房窯屋（箕輪町）パン
ドイツパンと菓子の店ビオランド（山形村）パン
osanji（東京都）焼き菓子
こめはなや（辰野町）おにぎり
リバーブックス（辰野町）貸本
美簫堂（伊那市）雑貨／ワークショップ
トークイベント（磯木淳寛さん・植原正太郎さん、藤本智士さん）
トビチ アーカイブライブラリー
ボヘミアン珈琲（松本市）コーヒー
絵本読み聴かせ

I GoodLocalBar さゝ家

今古今と 日日食堂（神奈川県）和食バル

J サン・スペース白木屋

ROOM CHICORA（箕輪町）美容雑貨
りすなお店（兵庫県）雑貨
Margaret（京都府）アクセサリ雑貨
toya（京都府）アクセサリ雑貨
VANASPATI khadi haat kaam（京都府）服飾雑貨
村田木工所（京都府）小物／流木家具

K キューティースター

No name (辰野町) ライブハウス/カフェアンドバー
mons mare (宮田村) コーヒー
teenage cooks (大阪府) ホットサンド/スープ
triangle (長野市) 古着
takkiduda (山梨県) ライブアクト
オトシゴ (辰野町) ライブアクト
三村大悟 (辰野町) ライブペイント

L フジタヤ since 2019

甘酒屋 an's (辰野町) 甘酒
バーガーなゆた (箕輪町) バーガー
LOCOma (松本市) 似顔絵

M 京屋

ソーシャルバー PORTO (東京都) バー
トビチ アーカイブライブラリー

N 新栄堂

カホン工房 CHAANY (岡谷市) 楽器
旅する古物商 -hito.to- (塩尻市) 古物雑貨

O さらだや

ポン菓子ぼんちゃん (辰野町) ポン菓子
ロケットストーブづくりワークショップ

P @FUJIMORI

pizza santa rosa (諏訪市) ナポリピザ
移動販売トッキ (辰野町) カレー

Q タナカ

にっこり農園 (駒ヶ根市) パスタ/スープ
こはる coffee (伊那市) コーヒー
唐木屋 (伊那市) 焼き菓子
おかめひよっとこ農場 (伊那市) パンケーキ

R メトロスポーツ

無印良品イオンモール松本 (松本市) ワークショップ
4FA (東京都) 設計事務所ワークショップ
トビチ アーカイブライブラリー

S 吉江プロパン

O'JAYS GO GO (松本市) 衣類/雑貨
TRIP (辰野町) 家具
SIDE by COFFEE (駒ヶ根市) コーヒー
SOUP TRIP (伊那市) スープ

T STUDIO リバー

PLUS MORE (辰野町) フットリフレ
choufree (辰野町) キャンドル/雑貨/ワークショップ
works ICCO (岡谷市) アクセサリー/革工芸

U ブラザーミシン

CONTE (伊那市) 花屋
MADU (愛知県) アクセサリー雑貨
monoto (伊那市) 焼き菓子





トークイベント
ゲスト寄稿

2019年12月7日（日）

会 場：旧「角十」3階

参加費：各回1,000円（ボヘミアン珈琲による1杯のコーヒー付き）

1 10:30～12:00

小さなまちで生きていく

『「小商い」で自由にくらす』の著者、磯木淳寛さんとNPO法人 greenz のCOOである植原正太郎さんに小さなまちで生きていくことや持続可能なまちづくりについてお聞きました。

2 13:00～14:00

まちを編集する

「魔法をかける編集」著者であり、秋田県発行「のんびり」の編集長、藤本智士さんに個人にも企業の人にも行政の人にも聞いて欲しい「編集」の話をお聞きました。



数人のDIYから、みんなのDIYへ

磯木 淳寛

商店街を歩くのが好きだ。散歩の延長線上で、あっちにふらり、こっちにふらり。小回りを利かせて楽しむには商店街のサイズは小さいほど都合がいい。さらに言えば、車はあまり通らないほうがいい。商店街の主役は、道路や車ではなく、お店とお客さんであってほしいからだ。「歩行者天国」という言葉もあり聞かなくなったが、なにごとく天国は極楽である。

12月の寒風吹きすさぶ日、辰野町にトビチマーケットという天国が現れた。日本全国、商店街が寂しくなっている今、地方の商店街に人が溢れるというのは画期的なことだ。トビチマーケットには、本当に人が溢れていた。途中、運営者の友人とばったり会々と、「来場者の数が、もう3000人を超えたんです！」と白い息を吐きながら、弾んだ声を聞かせてくれた。

その友人との縁があつて、ありがたいことに「小さなまちで生きていく」と題したトークイベントのゲストとして、対談相手である植原正太郎くん（ZPOグリーンズ）と一緒に招いてもらった。拙著『小商い』で自由にくらす』では、千葉県房総いすみ地域のマーケット文化や経済、そして、まちはひとり一人の思いと行動の結果としてつくられるということを書いた。つまり、与えられるものではなく、DIY (Do It Yourself) によってつくりあげる手ごたえにこそ、人は幸福感を感じるのではないか？ということである。

トークでは、小さな町だからその可能性や、自前で始めた学校教育のプロジェクトについても話をさせて頂いたが、おもしろかったのは、

トビチマーケットそのものももちろんのこと、トークイベントの会場づくり自体も運営メンバーのDIYだったことだ。会場となった「角十（かくじゅう）」の建物は長年使われていなかったため、放置されていたモノが高く積まれて山になっていたという。そこで辰野町に関わる学生たちが仲間を集めて繰り返し通い、ホコリまみれになりながら片付けたのだ。前日の夜に、ビフォーアフターの写真を見せてもらったが、空間がキレイになった驚き以上に、自分たちで会場と大切な思い出をつくりあげた学生たちを羨ましくさえ感じた。

なにごとく「準備は長く、本番は一瞬」。そして「楽しい時間はあつという間」である。その日顔を合わせた知人友人たちは、マーケットの終了時間が近づくにつれ、口を揃えて終わってしまうのを惜しんでいた。しかし、トビチマーケットに訪れた数千人のお客さんたち以上に、運営メンバーにとってこの日はあつという間だったに違いない。後日話を聞くと、こちらの予想そのままに、多くの方に「またやってほしい」と言われるという。

「トビチマーケットは1日限りの未来の風景なので、次は無い」と話すが、きっと彼らが求めているのは「やってほしい」ではなく「一緒にやろう」なのではないかと、ふと思った。人や空き店舗、あるものを活かして今無いものを。未来をつくろうとする当事者が次々に現れた先に、10年後の楽しい辰野町の商店街の姿がある。

町を変えるのはあなた自身

藤本智士 (Re:S)

僕がトビチマーケットに参加した理由は一つ。常日頃、優秀だと感じている編集者の奥田悠史くん（〇と編集社）に誘ってもらったから。僕はここ数年、編集者は書籍や雑誌の編集から、地域編集にシフトしていくべきだと言いつけている。僕にとって奥田くんはそのナチュラルな実践者の一人だ。雑誌が売れない時代ゆえ、そうでもしなければ食べていけないといったことではなく、シンプルにいま地域編集者が世の中に求められていると感じている。だから彼もきつと、偶然ではなく必然として、もともと縁のなかった辰野町に関わることになったんだろう。

編集を施すメディアはなにも誌面だけではない。自分が暮らす町をどう編集するか？ という視点を持つだけで、他力本願でサービスを享受するだけだった日々は大きく変化する。そんな編集のチカラを知る「〇と編集社」のメンバーたちが作り上げたトビチマーケットは、僕にとっても実に学びの多いイベントだった。

イベント直後の彼らに、今後について話を聞いたとき、彼らはトビチマーケットそのものの変化や成長を願っているわけではないと言った。マーケットの開催をきっかけに辰野町に暮らす人々の意識が変化していくことを目的にしているのだと。イベントであれ雑誌であれ、それぞれの完成がゴールになりがちななか、彼らの視線はその先にあった。そういうものにこそ編集は魔法のチカラを発揮する。あらためて彼らを頼もしく思った瞬間だった。



そもそも編集者という人種は、ピンチをピンチと思わず、それをチャンスに変えることが楽しくてたまらないタイプの人間が多い。春を求めて北上するミツバチのように、ピンチを見つけては嬉々としてそれを編集のチカラで好転させようとする。しかし彼らが稀有なのは、いつだってこの大切なメッセージを忘れないところだ。

「状況を変えるのは僕たちではなくあなた自身」。

トビチマーケットはまさにそんなイベントだったように思う。

強い想いと行動が未来を変える

植原正太郎

このままにしていればいつか消滅してしまうだろう田舎のシャッター商店街を前にして「ラッキー！」と思える人間はどれくらい存在するだろうか？頭のネジが何本か外れていないと、そんな発想にはならないだろう。普通の人なら諦めるのが賢明な対処だ。長野県辰野町で開催された「トビチマーケット」は「ピンチはチャンス」という言葉を地で行く企画だ。商店街の空き店舗を活かし、1日で4000名を超える人を県内外から集めた。人口減少の進む地方の苦しい状況は「強い想いをもった人の行動によってのみ変わっていく」ということを、彼らは教えてくれる。いきなり話が変わるが、いま世界中のビジネスで「サーキュラーエコノミー」が注目されている。「循環型経済」とも訳されるこのアプローチは「モノを生産して、販売して、利用して、廃棄する」という一方通行の「使い捨て経済」の対極に位置づけられている。サーキュラーエコノミーは資源の循環利用を前提としてる。捨てられてしまうスニーカーを回収して、素材にし直し、またスニーカーをつくるといった様に、経済に循環のループを取り入れる。トビチマーケットはそのような文脈でも評価されるべきではないだろうか？2033年に日本の空き家率は30%を超える。それらの空き家を日本全体で使い捨てにするか、それとも循環利用して新しい経済をつくるか。そんな大きな問題に、彼らの取り組みは一つの解決策を示してくれた。トビチマーケットはこれから一つひとつの空き家を再生させていくだろう。そして物件が埋まっていくだけではなくそこには人のつながりも生まれていく。10年後まで続く地道なチャレンジかもしれないが辰野の商店街、そして地域を再生するまで応援していきたい。



植原正太郎さん



磯木淳寛さん



対談1

下辰野商店街、100年の歴史。
変わったもの、変わらないもの。

辰野町長 武居保男

×

靴のフジタヤ 桑澤利和

下辰野商店街、100年の歴史。変わったもの、変わらないもの。
12月7日。普段は人通りのまばらな下辰野商店街、たった1日だけ人で溢れました。

私たちのような若い世代の目には、その光景はとても新鮮に写りましたが、昔からの商店街を知る店主さんたちは「昔の商店街に戻ったようで嬉しい」と懐かしんでいました。

シャッターが目立ち、寂しさが漂う前、昔の商店街はどのような景色だったのでしょうか。

昭和、平成、令和と約90年3代にわたって商店街を見守ってきた靴のフジタヤ店主の桑澤さんと、商店街生まれ、商店街育ちで辰野町の現町長、武居さんに商店街の思い出や、明治から今日までの商店街の変遷を語っていただきました。

聞き手・文 北埜航太



不自由な時代が一番賑やかだった

北埜 今日はお話伺えることを楽しみにしていました。よろしくお願いします。

武居 よろしくお願ひします。今日は商店街の歴史がテーマということで昔の写真アルバムを持ってきました。

北埜 おお、ずいぶん分厚いアルバムですね！この白黒写真はどちらですか？

桑澤 これが昭和12年の商店街だね。だいぶ変わったよねえ。懐かしいなあ。私は商店街でフジヤという靴屋をやっているんですけど、この店は親父が昭和6年ごろに創業しました。この時はまだ商店街なんてなくて田んぼが広がっていたんですが、ちょうど伊那電気鉄道が開通したもんだから、「駅の方に出ればきつと儲かる」と親父が考えてね。北大出から越してきたんです。そこからだんだんと店が集まり出して今のような商店街が形作られていったんですよ。

武居 そうだったんですね。私の家は運送業を営んでいて元々は諏訪に住んでいましたが、大正時代に辰野町に移ってきたそうです。鉄道が茅野、上諏訪、岡谷と伸びていたのに合わせて営業所を作りながら、辰野に行き着いたそうです。

桑澤 そうなんだよね。辰野駅は昔から運送の拠点になってて、明治ごろから荷物を運ぶ馬が行き交って、道には馬糞だらけだったみたいだよ（笑）。

北埜 えー。この商店街に馬が歩いていたらなんて想像できない……！

武居 そうでしょう。辰野の歴史が詳しく書いてあった本には、「世の中



が不自由だった時代が、辰野町にとっては一番賑やかだった」という印象的な言葉が書いてあるんだけどね。

明治時代には、商店街には2つの駅があったんですよ。明治39年にできた中央本線の「辰野駅」と、伊那電の終点「西町駅」。この2つには距離があって、乗り継ぎに1日くらい時間がかかってしまうもんだから、辰野に泊まらないといけなかった。それで、旅館ができたり、日用品店、眼鏡屋さん、病院までできたんです。その後、大正13年に中央本線と伊那電は連結するんだけど、そのころが一番駅前が賑やかだったそうです。

みんなの「遊び場」だった商店街

北楚 そんな商店街での暮らしのなかで特に印象に残っていることってありますか？

桑澤 私が一番印象に残っているのは、昭和まであった辰野劇場だねえ。映画上映しつつ、合間に歌謡ショーもやっていて、島倉千代子とか、結構有名な歌手も歌っていたんです。私が小学校の時なんかは学校から帰ってくると、「映画観せろや」って劇場の岩井オーナーの息子のツグオ君に頼み込んで、こっそり劇場の横扉から入って観てたよ。親父さんに見つかっちゃって「だめだコラ！」なんてしょっちゅう怒られたりね（笑）。このあたりは娯楽も少なかったから、近隣からたくさん人が集まってきましたねえ。

武居 私が子供だった頃は、商店街に行けばなんでも揃ったんです。だから、川島だとか近隣の村から商店街行きのバスが出ていてね。バスからものすごい数の人が降りては、日用品を買ったり、病院に通ったり、



辰野劇場と
その前で遊ぶ子どもたち

町内会対抗の仮装大会



娯楽を楽しんで帰って行きました。いまだに川島や北大出の人たちは商店街の方へ行く時は「町へ出る」って言われるのもその名残なんです。

北埜 今でいうショッピングモールに人が集まるように、昔は商店街に人が集まっていたんですね。

桑澤 そうそう。あとは毎年2月になると「辰市^{たついち}」っていう催しをやったり、昭和の初めごろまでは商店街の町内会対抗の仮装大会もあつてね。卑弥呼だとか、忠臣蔵だとか日本の歴史上のキャラクターに扮してそのリアルさを競い合うんだけれど、店主が参加する本気の行事でね。

武居 昔はよくやりますね（笑）

桑澤 みんな熱があるんだよね。仕事も忙しいけど、遊びも本気だった。それをお客さんも楽しんでくれていたしね。当時は、各店ごとに売上もそんなに変わらないし、みんな和気あいあいとしていたよ。良き時代でしたね。

北埜 へえ。商店街ってただ買い物するための場だけでなく、お客さんもお店も交流し合う遊び場みたいなところですね。

「人中心」から「車中心」へ

北埜 そんな活気ある商店街から人が減り始めたのはいつごろからだったんですか？

桑澤 辰野劇場が斜陽産業にありのちに「辰野スーパー」として生まれ変わるんだけど、そこが郊外に店を移転してくらいからかなあ。当時はまだ、お魚屋さんとか、お肉屋さんとか一つ一つの店舗が分かれていたんだけど、その頃には全国的に、個人店からスーパーに移り変わっていく最中でこの町にもそういう流れが来たんだね。でも、大手の資本

には敵わなくて、また別の会社買い取られてね。その後、そのスーパーは車の通りが多い郊外に移転してしまつて、商店街には食品スーパーは無くなつてしまつたんだよね。集客力のあつた大型店がなくなつてしまつたからお客さんもめつさり減つてしまつて、商店街は一気に静かになつてしまつたね。

武居 私は商店街を昭和52年、18歳で出ましたが、その時には人中心だった商店街の道も車のために道路拡張され、車中心になっていました。商店街が衰退を始めたのもその頃からですね…。

私が学生の頃は、店を継ごうっていうよりも、いい大学に入って東京で一旗上げようと思う同世代が多くてね。私が東京で30歳ごろまで働いて戻つてきてみたら、見渡しても誰もいなくなつていた。人は歩いてないし、衝撃を受けました。

「やる側が楽しむ」は今も昔も変わらない

武居 戻つてきてからは商工会に勤め始めたので、なんとか昔の賑わいを取り戻そうといろんな企画を始めたんですよ。

北埜 どんな企画をやったんですか？

武居 私が小さい頃、11月の末になると「えびす講」っていうお祭りがありましてね。これが大盛り上がりで、七福神に扮した店主がトラックに乗って、マツトレスだとか、座布団、みかんとかを商店街で投げまわるイベントがあつたんです。お客さんへの感謝祭だよな。私が大人になった時にはその催しはなかったんだけど、どうしてもそれを復活させたくてね。七福神の化粧をして、手縫いで衣装を作つて、広場でえびす講を再現したり。他にも辰市を復活させて商店街の中で綱引きをやった



左：桑澤利和さん 右：武居保男さん

りもしました。何より僕らが楽しむっていう姿勢でやってきました。

桑澤 武居さんは本当によくやってくれたもんね。

武居 ありがとうございます。でもだからこそ、トビチマーケットは感動という以上に衝撃的でした。昔から商店街にいるおじいちゃんおばあちゃんたちは、人で賑わう商店街を見て涙を流して喜んでいましたし。まさにあの時の光景は昭和30年代から40年代の商店街でした。

桑澤 そうなんだよね。私たちがやってきたイベントはとにかく近隣の人を集めるっていう目先の考えじゃないじゃない。でもトビチはもっと広範囲な感じで。例えば、私のところに来たお客さんは、松本、飯田、諏訪、茅野から来たんです。あんな寒い中でも。さてなんだろうかと。思っちゃいましたよ。私たちも考え方を変えなきゃいけないと。

武居 トビチマーケットに参加して、時代の空気のようなものを感じましたね。無理なく、ゆったりとした幸せを感じられるような。もしかすると、ここ数十年の挑戦は無理をしていたかもしれないなど。でも、私たちとトビチで共通していたことがあるとすれば、やっぱりやる側が楽しんでるっていうことだと思っくんですよね。商店街の皆さんも嫌々ではなく、楽しんでやってきたから続けてこられた訳ですし。やる方が楽しんでいなかったら、来てくださる方も楽しくないと思うんです。

トビチマーケットはもうやりませんと言われて残念ですけども、もしもう一回やるなら、町内の人にももっと周知してやりたいですね。

桑澤 そうだねえ。歳をとると我々はどうしても情熱がなくなってしまうんです。だからトビチマーケットの時の10分の1くらいの賑わいがずっと続けばいいなあと思いますよ（笑）。私たちもまだまだ頑張らないといけないなあ。



2019年12月7日、トビチマーケット当日の「靴のフジヤ」前



靴のフジヤさんは、独自にお手製のポスターを作って応援してくださっていた。

道の幅。人通りの数。シャッターの多さ。
70年前と今を見比べると、その景色は大きく異なっているように見えます。
でも商店街で生きる人たちの心の中にある、「楽しい精神」は今もたしかに、引き継がれているかもしれない。変わったものと、変わらずに受け継がれているもの。その両方に出会えた貴重な対談になりました。

対談 II

商店街の10年後を考える。
まちの文化を醸成させる若者たち。



長野県木曽町の商店街で
営業する「en-shouten」



O to &
金井一記

×

en-shouten

井尾さら紗

井上敬教

あなたにも、何度も通ってしまうお気に入りのお店があるでしょうか。通い続けるお店と、そうでないお店の違いはどこにあるのでしょうか。店主の手柄が良く、こだわりが伝わってくるお店は、自然と足が向かってしまうように思います。

辰野町、そして近隣の木曽町にも、何度も行きたくなるお店があります。辰野町の古着屋“O to &”と、木曽町の生活雑貨のセレクトショップ“en-shouten”です。どちらも、トビチマーケットにご出店いただきました。

“O to &”を営む金井一記さんは、辰野町の山間地域で古着屋を営んでいます。トビチマーケットへの出店をきっかけに、商店街で新しくお店を開こうと考えています。また、“en-shouten”を営む、井上敬教さんと、パートナーでアクセサリー作家の井尾さら紗さんは、2019年6月に木曽町の商店街にてお店をオープンされ、既に木曽のまちに新しい風を吹かせています。

今回、下辰野商店街への出店を考えている金井さんと共に、木曽町の本町商店街で店主をされている井上さん・井尾さんのもとを訪れ、商店街やまちの未来について語り合いました。

聞き手・文 山下実紗

トビチマーケットで感じた雰囲気

金井 今日は、お会いできて本当に嬉しいです。

井上 僕たちもお話できるのを楽しみにしておりました。

金井 来る前にen-shoutenさんのHPを見たんですが、井上さんは、木曽にいらっしやる前に東京で「文化活動を応援するバー」をやられていたんですね。僕もそんなバーを辰野町で開きたいと思っています。

井上 いいですね。僕はもともと飲食店もやっていて、文化的なことを軸に色々な人たちと話をするのがすごく好きでした。サロンの空間を作るとそういう空気がどんどん醸成されて行くのではないかなと思ってやっていました。

金井 いいですね。僕はトビチで使わせてもらったフィリピンパブでそれをやりたいなと思っていますよね。

井上 トビチのフィリピンパブの会場良かったですよね。僕、その話をしたいと思っていたんです。

あそこでのライブパフォーマンスと空間には、すごく感銘を受けました。ああいう、色々な地域の人があるライブパフォーマンスだったら、ポップスとかロックみたいなわかりやすいパフォーマンスをやることも考えられるはずじゃないですか。なのに、そうじゃなかった。そして、それを一任している企画メンバーの雰囲気がいいなと思ったんですよね。

金井 あのアーティストとは、ただ仲が良かっただけなんですけどね（笑）。でも確かに、トビチマーケットの運営は、それぞれの店舗ごとの世界観も含めて、全部、各店舗さんに一任されましたよね。

井尾 大きなプロジェクトで、「運営は各店舗に一任する」と言いきっちゃうところは勇気がいるし、それがトビチのいい雰囲気を作っている



金井さんがトビチマーケットで使用した会場は元々フィリピンパブだった『キューティースター』。

音と映像を使って演奏するTakkiduda。完全即興で演奏し、音の変化に応じた映像をリアルタイムで変化させる。

だなぁ、と帰りの車の中で井上と話していたんですよ。あと、町の人たちに10年後のビジョンを見せることがすごく大切だなんて。ここにいて常々思っているのも、すごいなあと思いました。

それぞれの業種が、文化を醸成させていく

山下 en-shoutenさんのある、この「本町商店街」には、歩く楽しさがありますか？

井上 歩いてみると意外に楽しいという声はありますが、車も通りますし、やっている店が減ってしまっていますね。地元の人が利用するお店はあるけど…。

金井 難しいですよ。どうやってたら、いわゆる文化を醸成させていくお店ができると思います？

井尾 一番欲しいのは、古着屋さん、カフェ、本屋さんの3つですね。

木曾には、地元の方が行きつけの老舗の喫茶店はあるけど、ふらっと気軽に立ち寄れるカフェがなくて。私たちもカフェをやって欲しいという声をたくさんもらいます。うちは、ちょっと入りにくいと言われることがたまにあるんですけど、カフェや本屋さんがあつたら、目的があるので入りやすいからいいですよ。

金井 全部やったらええやないですか。僕のやっている古着屋の〇さ〇〇も10個くらい仕事やろうと思っただけで名付けたんです。

井上 そうですね。でも僕たちが全部やるのではなく、色々な人がそれぞれの文脈で表現して、町にグラデーションがあるのがすごく面白いと思うんですよ。誰もやりたいたい人がいなかったら、僕たちもお店に古本を並べるくらいはやるかもしれないですけどね。

山下 グラデーションっていい表現ですね。en-shoutenさんは、グラデ



左：金井一記さん 中央：井尾さら紗さん 右：井上敬教さん

ーションのどの位置だと思われますか？

井上 自分で言うのもあれなんですけど、うちはギャラリーのようなコアさと、コーヒースタンドみたいなポップさの真ん中ぐらいだと位置付けていて。もっとコアなものと、もっとポップなものがあってもいいなと思うんですよ。

金井 確かに。そしたら間口が広い町になるよね。

井上 そうですね。それぞれに影響されて、新しい営みが始まりそうですね。僕らが古着屋さんが欲しいのも、例えばロックが好きで10代がスキニーを履いたりして、それぞれのカルチャーが深掘りされていく面白さがあるからなんです。

金井 そっかあ。古着屋やめようと思っていたんだけどなあ。買い付けに行くのもお金がかかるし、商店街で色々始めるのに、お金貯めなきゃな（笑）。

辰野らしさ、木曽らしさ

山下 これから木曽町ではen-shoutenさんをきつかけに、新しく何か始めた人たちが増えていくと思うのですが、どんな人たちと仲間になっていきたいですか？

井上 楽しそうに仕事をしている人たちがいいよね。

井尾 うん、だから辰野に行った時に、すごくいいなと思っていて。プロジェクトとかも大変そうだけど、辰野の人たちは悲壮感がなくみんな楽しそうに働いている。

山下 ひ、悲壮感…（笑）。

井上 すごく大変なことをやっているのはわかるんだけど、全然そんな素振りを見せずに、みんな楽しそうでいいなあって。

金井 特に赤羽孝太さんは、周りの人を明るくするよね。根本的にポジティブなんですよ。だから一緒にいて楽しい。

山下 確かに、孝太さんはお金とか人のリソースが全然なくても、なんとかしちゃうもんね（笑）。木曾はどんな感じの人が多いですか？

井上 木曾は、移住者もいろいろな人がいて、面白いですよ。尖っている人や、「仙人」っぽい人もいて。木曾は場所柄もあって、マインドが内向きになりがちかもしれませんが。南の島とかだったら、みんなオープンになると思うんですけどね（笑）。でもそれは逆に面白味があっているなあ、と思っています。

金井 「仙人」っぽい人っていいなあ。

井上 もともと、東京に10年くらい住んでいたのですが、今は僕たちも「仙人」と、都会の間の人間だと思っていて（笑）。都会の人たちに、こんな生き方も楽しいよ、という提案をしたり、地元の人たちの好奇心のタネになったら面白いなと思っています。

商いを通して表現したいこと

金井 en-shoutenさんはどうやって商品を選んでいるんですか？

井尾 買い物をする体験を通して、その人たちのものの選びの軸になるセレクトをしたいと考えています。日常使いできて、質が良いのと、社会的メッセージ性があるものを選んでいきますね。あと、一度買ったものが、ボロボロになった時に、もう一度同じものを買いたいと思うモノを取り扱っています。

井上 基本、自分たちがしばらく使って、本当にいいなと思うものを扱うようにしてるよね。選ぶのにはかなり時間をかけて考えています。め



トビチマーケット当日、en-shoutenは空き店舗を利用して雑貨店をオープンした。

ちやめちや良くて、高かったら富裕層しか買えないし、バランスが大
事ですね。この町でこの店をやることで、町にモノ選びのいい変化があ
ったらいなと思っています。

金井 買うことは投票と同じだから、モノ選びの軸ができれば、すごく
いい変化になるね。

井尾 そうですよ。だから、お店に地元の高校生や若い世代の人たち
が来てくれると嬉しくて。うちの商品が売れる、売れないの話ではなく
て、高校生の時に自分で買うという体験をして欲しいんですよね。

金井 わかるわ。僕も、中学生に来て欲しいというのもあって、商店
街に店出そうと思っているんですよ。でも、地元の子達も卒業したら、
みんな出ていちゃうよね。どうしたらいい？

井上 木曽も一度は出て行っちゃう人が多いんですが、en-shoutenも出
してから、もともと住んでいた地元の方々にもすごく喜んでいただいて
いるんです。

井尾 町が楽しそうな雰囲気だったたら、戻ってきたいと思うよね、き
つと。

インタビューが終わったあと、金井さんと一緒に木
曽のまちを歩き回って、井上さんと井尾さんにオスス
メされた、老舗の「小池糰店」で味噌を買いました。
そこでen-shoutenの話をしたら「これ、美味しいか
ら」と、甘酒をサービスで頂いてしまいました。きつ
と、en-shoutenは木曽で愛されている存在なのだろ
うな、女将さんたちのニコニコした顔を見てそう思い
ました。

今回の対話では、「グラデーション」という言葉がた
くさん出てきました。老舗のお店も、新しいお店もそ
れぞれが立ち位置を認識して、まちに色々なグラデー
ションがある状態はとても面白そうです。それは、既
にある文化と新しい文化が混じり合い、醸成されてい
くことなのかもしれません。木曽町と、辰野町の10年
後は、きつと今より面白くなっているはず。いつかま
たこの対談を実現できたら… また一つ未来への目標
ができました。

12月7日 4時55分、トビチマーケット当日の朝を迎えた。
 「僕らの子供たちが成長した10年後、住んでる街の商店街がこんな感じなら楽しい
 と思って、たった1日なんですけど、こんなことするんです。」長野県南部、上伊那
 郡辰野町…その町の商店街の一角で、洋品店の跡をリノベーションして、スタジオ
 やコワーキングスペースなどを運営するSTUDIO リバーの赤羽コウタ氏から夏の終
 わりにそんな話を聞いた。たまたま、縁あって商店街のど真ん中の空き家をお借り
 して暮らすことを検討していた時期でもあり、なんだか楽しい景色がリアルに脳裏
 に浮かんだ。

「ついては、その準備などにお力を…」
 矢継ぎ早に繰り出すコウタ氏の言葉にやや被せ気味に「勿論です！！やります。」
 と答えたのも記憶に新しい。それからはあっという間の日々…シルクスクリーン
 印刷を生業としているため、当日の商店街を彩るフラッグやスタンプラリーで使用
 するトートバッグを印刷するなど、事前準備は慌ただしくも楽しく進捗した。トビ
 チマーケットの当日、我が家は“さらだや”という屋号でポン菓子の実演販売とロ
 ケットストーブのWSで参加。開店と同時に家族連れで賑わい、思いもよらない盛
 況ぶりに正午には用意した材料を完売した。漸く街に繰り出すと行き交う人々の笑
 顔に嬉しさがこみ上げる。トビチマーケットは大盛況のうちに幕を閉じた。

夕暮れの宵の街にいつもの静けさが戻り、若者たちが素敵な空間で盛り上がる中、
 そこを離れて、老舗の焼き鳥店「とり金」のカウンターで一献傾ける。商店街の重
 鎮でもある大将が、やや興奮気味に「いやーたいしたもんだ。こりゃ、商店街もこ
 れから考えなきゃいかん。」

そう語る大将の笑顔が印象的だった。10年後の商店街の姿を前借りした夢のよ
 うな1日は終わった。またいつか、この町で楽しげな企てが起きる雰囲気を漂わせ
 つつ。

原田信久
 有限会社 原田技研



初めは「何か協力出来る事あるかも」で始まった私の「トビチマーケット」。気づくと加速的に巻き込まれ、また、私の周りも巻き込み「もっと出来る事はないのか」と積極的に参加させて頂いておりました。その理由は「この企画の面白さ」「参加者皆の個性と活気」に尽きます。参加者唯一の下辰野生まれ、下辰野住みの地元っ子として、日頃から地元商店街の現状を切なく思いつつも、何も行動を起こせなく、歯痒い気持ちで過ごしておりましたので、この企画を聞きゾクゾクしたのを鮮明に覚えております。その位インパクトのある企画でしたし、私にとっても良い刺激を貰えるだろうと飛び込んでいきました。そして飛び込んだ先には…。私を含め「個性の塊」の様なメンバー達がおりました。しかし、だからこそ色々な意見が飛び交い、沢山のコラボが生まれ、あの日が出来上がったのだと思っております。

当社のお客様にも沢山ご来場頂きまして、数ヶ月が経っても来場頂いた方に「次はいつ？」とお声かけ頂く現状に、感謝と刺激を貰い「次は何をやろうか？」と思案する日々です。一緒に作り上げた仲間に深い感謝と、辰野のこれからに淡い希望を持ち、これからの日々に繋げて参ります。お疲れ様でした。ありがとうございました。

田中智大

主催者の方を知っていることもあり、出来るだけ協力をしたいと思い、私たちの旧宅でほたる祭りに飲食店をやっていた所があり水場や調理用具・排水も装備しており、そんな場所を探している方もおられる様なので、雑多な荷物を片付けました。

新しい家の方も路面店なので、ショーウィンドーと駐車スペースだけでも有効に使える方がおられる様なので、2カ所使ってもらう事になりました。色んな物を片付けるのが大変でしたが、あの日の賑わいを見たら片付け甲斐があったなと思いました。

一度だけではもったいないイベントですね。裏方の方々が準備やら、当日の役割等で大変ご苦労されたと思います。本当にお疲れ様でした。

田中育夫

有限会社タナカ ダスキン天竜





C @ECHIGOYA

B Coffee Top





D 茶の間広場

E まちのキッチンおかって





F @OHSUMIYA



G げた屋





商店街の「たかだや花園」さんが用意していた
お花くじ（なんとハズレなし）



自転車冒険家の小口良平さんは、
世界を旅した自転車を携えて
出店してくれた。

H 角十



パンにおにぎりに、焼き菓子里野菜に…
並べたものは、昼頃にはすべて売り切れました。



最後は集まれる人で集合写真撮影！

J サン・スペース白木屋



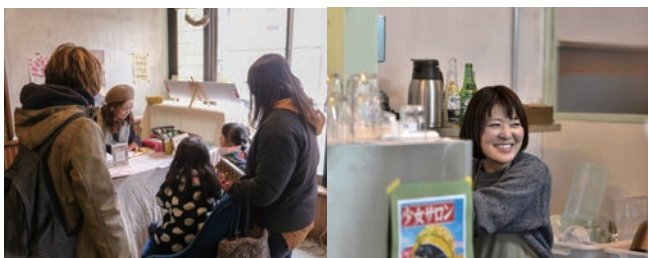
I Good Local Bar さゝ家





K キューティースター





L フジタヤ since 2019

N 新栄堂



M 京屋





P @FUJIMORI



O さらだや



R メトロスポーツ





Q タナカ
当日のモーニングからディナーまで
オープンしました。





S 吉江プロパン

T STUDIO リバー





U プラザーミシ

写真撮影

塚原朋子
齋藤 大亮
五味ひづる
奥田悠史

「トビチ」の余韻とともに

「古民家ゆいまゝる」矢ヶ崎芳恵

12月7日の朝は、心がなんだかそわそわしていた。どんな街が待っているのだろう。

「ゆいまゝる」の留守番を（その日は無料休憩所として提供していた）夫と替わると、私は小走りで駅前へと向かった。

「目指すのは蛸祭り平日くらいのにぎわい」孝太さんからはそう聞いていた。いや、それが多い。それよりなにより、とってもおしゃれな人たちが街を、歩道を埋め尽くしていた。

なんと表現したらよいのだろう。どこか別の街に紛れ込んでしまったかのような錯覚。

「感動して言葉が出ないよ」途中出会った知人はそう話していた。まったく同感。店から店へホッピング。すべての店をまわることはできなかったが、楽しげに街を闊歩する人たちを眺めているだけで、なんだか私の心は満たされていた。

翌日、いつものひっそりとした商店街に戻った。でも自分の脳裏に残った残影が未来の希望へと私をいざなっていた。

（ありがとう）

トビチマーケットを後援して

「農家民宿 月のもり」市川直美

あれはいつだったんだろう。役場の野澤さんから「後援してください。」という趣旨の電話を頂き、二つ返事（だったと思うが…）で了承し、特に何もなく日々が流れ…。ある時Facebookで、夜な夜なトビチマーケットの準備で作業をしているという記事を目にし、何となく芽生えた罪悪感。自分の仕事で現場作業は手伝えないし、イベント当日は、9月に入ったランチのご予約で何もできない。みんな寒いだろうな。お腹空くだろうな。ああ、そうか、だったら御飯を届けよう。私に出来る後援だ。決心した直後、ゆいまゝるさんへの話をしたら、私一人では、と主食を担当して下さることに、しかも他の宿泊業の方々に、あつという間にお声掛けしてください。イベント直前の夜、主催者の皆様、出展者の方々と一緒に豪華なディナーとなった。ゆいまゝるオーナーの芳恵さんの機転とマンパワーに感謝。また辰野が好きになる良い夜だった。

「トビチ」にとびちった夢！

「アトリエ和音」三村美香子

ゲストハウスアトリエ和音、誕生の仕掛け人は〇と編集社の孝太さんとのどかさん。初めて内覧したのが2016年12月。あの日から3年経った未来の今、空き家だったあの家はワクワクするゲストハウスに生まれ変わり、アトリエでは本物のアーティストが育ちました。（自画自賛…m()m）

そして2019年12月7日。アトリエ和音のスタッフもトビチマーケットで10年後の未来の1日を体感。

【角十にて】TOMOMIがビオランドさんのドイツパンとお菓子&丹精込めて育てたオーガニック野菜を販売し早々に完売！

【No nameにて】DAIGOが人生初のライブペインティングに挑戦！全身で描くパフォーマンス。白いキャンバスにカラフルな絵具が飛びちったー！チャンスを下さった金井さん。前夜準備して下さった田中さん。関係者の皆様に感謝致します。この日トビチにまかれた種は10年後どんな色の花を咲かすのかなあ。

トビチマーケット について

「古民家民宿 おおたき」大瀧利久

主催者の〇と編集社・赤羽孝太氏とのディープな出会いは2017年9月頃と思います。辰野町への移住後、自身でのリンベーションも一段落し開業手続きに入った時、大きな問題にぶつかりました。それを手助けしてくれたのが孝太氏です。

それ以来度々の出会いの中である時は豪快に、ある時はまるでガキ。その魅力に今後の辰野町には無くてはならない人物となる事の思いを抱いていました。

はじめトビチマーケットを知った時には、私にはあまり関係のない事との思いで無視していましたが、孝太氏に直接お会いしてその思いを聞いた時にはアイデアの面白さと情熱に引き込まれていました。そして、集まってきた仲間と共に、この思いを成就できなかった時の落胆ぶりを考えると何か手助けをしなければいけないと思うようになったのです。そういう割には大した応援は出来なかったのですが、当日に行き会ったクマ歩き孝太氏の姿に安堵感を覚えました。収支の程は分かりませんが、午前中の賑わいと新聞報道では大成功と思われ嬉しい限りです。おめでとう！

ボヘミアン珈琲 渡邊比呂

「たのしい暮らしをみずからつくる」

これは、ワタシ的トビチマーケットのテーマです。

私はおいしいものを食べることが好きです。普段は松本に住んでいますが、松本のおいしいお店を巡って365日食いつなげる自信があります。でも、トビチマーケットの素晴らしいところは、食べたいと思ったお店を、自分のまちに呼び出すことができるということでした。「無い」場所に、あつてほしいものを「作り出す」というのは、きつとたのしい生き方だと、私は思うのです。ちょっと凝った料理にこだわったり、きれいな景色を探してカメラ片手に散歩してみたり、トンカチの扱いに苦労しながら木製の棚をこしらえてみたり。日常のこういった時間は、生活の中に既製品とは違った彩りを添えてくれます。もちろんこれは、行き過ぎると原始時代至上主義に陥り、ディスカバリーチャンネルを延々見続けたあげく、最後にはアマゾンの密林目指して旅立ってしまうという結末を迎えてしまいますが、暮らしのすべてを自分でつくるまでいかずとも、用意されたコンテンツばかりの生活の中に、すこし工夫を加えてみるのも、実にたのしいものです。

トビチマーケットでは、トークイベントの会場である旧「角十」さんの会場整備をおこなうというかたちでお手伝いさせていただきました。〇と編集社の山下実紗さんから下されたミッションは、「トークイベント会場になるフロアに山積みになった、思い出の詰まったたくさんさんのモノたちを片付ける」ということでした。私は片付けのできない人間です。なぜ片付けができないかというと、部屋に落ちているよくわからない紙

くずにさえ圧倒的慈悲の心で接してしまうからです。もちろん焼却炉送りなどという残酷な行為に踏み切ることはできません。そして結局部屋はモノだらけになり、自らの部屋で遭難の危機に陥ります。したがって旧「角十」さんを片付けることは断腸の思いでありましたが、心を鬼にして取り組みました。ボヘミアン珈琲と〇と編集社の共同イベントとして、二日間片付けを行い、無事ミッション完了させることができました。自分で暮らしをつくるという営為は、生活の中の余白に対して行われます。旧「角十」さんの片付けは、その余白を、いわば「取り戻す」ための作業でした。生活のなかの何かが足りない余白の部分に対して、すでに用意されているものを受け取ってあてがうスタイルから、自分で作ってみるスタイルへの転換作業が、片付けイベントを通じて行われたのです。

用意されたものを受け取るかたちの生活スタイルは、様々な恩恵をもたらしましたが、同時に課題も生み出しました。日本全国で同じモノをいつでも享受できるシステムを整え、みんながそれに乗った結果が、寂れた商店街であり、国道沿いのチェーン店であり、「東京のほうがたのしい」という思いなのです。便利さはけっして悪いことではありませんが、そこから離れた価値観を持ったら、私の世界はすこし広がりました。たくさんさんのモノであふれた旧「角十」さんを片付けて、空っぽになったフロアに次の10年の可能性を見出したあの時間は、ある一つの象徴となっています。

自分の暮らしを自分でつくったら絶対たのしい。トビチマーケットにかかわっていくなかで、私はそう確信しました。その瞬間から、目指すべき10年後の街のビジョンが、はっきり見え始めたのです。



信州大学の学生団体「ボヘミアン珈琲」



3階建ての空き店舗「角十」からは
およそ25㎡以上の荷物を搬出。



トビチ market サポーター

吹き出し内
は出身地

このほかにも多くのサポーターに力を貸していただきました！



林 成美

辰野町

いつもは閑散としている商店街にたくさん人がいる。その感動で心が震えました。楽しそうに買い物をしている人たちを見て、まるでこれが辰野町本来の姿であるような気がしました。と同時に、現実になりたいと思ってしまいました。町民の意識を変えたイベント、ありがとうございました！



有賀 剛

辰野町

有賀 悦子

神奈川県

トビチ market、楽しかったです！ガラス磨き、空き店舗の片付け、掃除、看板作り、はじめましての方ともすぐに仲良くなれて、充実感たっぷりの日々でした。スタッフの方々の温かい雰囲気がとっても心地良かったです。当日、商店街に人がたくさん歩いている姿は、10年後、こんな風になるんだなあと感動！！



明星ひろのり

愛媛県

ワクワクする街にしたいって誰もが言っていて賛成するのですが、「どうする？」って難しいところで。トビチで「こういう街になったらなんか良いよね」って vision が伝わって、街の人から、「オラが街をこうしたい」って会話が始まったことが素晴らしいです。そんなトビチに関われてよかった。



苔米地 花菜

宮城県

トビチ。それは突然やってきた嵐でした。嵐のようにやってきて、嵐のように去っていったあの日々。とても楽しく、文化祭の前日が何週間も続いたような、あの感覚。そして迎えた当日。出店者として参加した私は、全く外に出られなかったけれど、外の熱と嵐の感じだけは壁を通して伝わってくる。あの嵐のような熱量が、10年後、この町にあふれていることを夢見て。



原田 美里

東京都

途中参加でしたが、準備に参加できたこと心から感謝しています。町に友達も増え、トビチマーケットは最高の盛り上がりで終わり、辰野町に引っ越してきて良かったと思いました。寂しいという気持ちよりも、満足感と、これから何度でもみんなで何かを作り上げられるという期待でワクワクします。



栗林 太朗

安曇野市

日々を楽しんでいる人の周りには、人生の楽しみ方を知っている人が集まってくる。「類は友を呼ぶ」トビチマーケットは、まさにこの言葉を体現するイベントだったのでは無いかと感じています。10年後の面白い辰野町に向けて、沢山の類友達と何が作り出せるか楽しみです。ありがとうございました！



五味ひづる

山梨県

マークやフライヤー作り、そして現場では前日と当日のみでしたが、近所の方が温かい飲み物を差し入れてくれたり、町の人達の静かな興奮が伝わってきました。どうなるか予想もつかなかった当日は、普段の様子からはまるで夢の中のような商店街。町内外への広報から、空き店舗をいかす本当に細かい部分の心遣い、いくつもの本気が1日を作っていました。



北埜 航太

東京都

「欲しいものを作ろう」、「やりたかったらとりあえずやってみよう」、「何よりやる側が楽しもう」。そういうトビチらしさが僕は大好きでした。立ち上げる人も、関わる人も幸せになれる、そんなプロジェクトを僕自身も作れたら…そんな夢を僕はトビチからもらいました。ありがとう！

「未来は過去さえもつくる」を体感した1日

一般社団法人○と編集社 山下実紗

働くなら「ここしかない」。そう一目惚れして内定をもらったのは、地域企業と海外を繋げる貿易関係の会社だった。内定を得て浮かれたのはつかの間、私は地域暮らしをしたことがない。果たしてこのような身で地域の社長さんたちと、仲良くなれるのだろうか。焦りが募り、たまたま見つけて申し込んだのは、辰野町でのインターンシップ。これが、全ての始まりだった。

辰野町で過ごしたのは、たった1ヶ月だけだったが、楽しそうに生きている大人たちにたくさん出会い、彼らと一緒に手足を動かした夢のような時間だった。気がつけばそれは、大学3年時に1年間ブラジルで過ごした時間を超えてしまうほど鮮やかで、衝撃的なものになってしまったのだ！

さらなる転機はまだ会社に勤めているときだった。仕事から帰って来て、モヤつきながらアイスを買っていたら、突然インターン時代にお世話になった赤羽から夜遅くに電話がかかってきた。「理事、やらない？」その一言で、私は○と編集社の理事となり、東京で2年間働いた後は会社を辞め、なぜかいま、辰野町に住んでいるのである。

辰野町の10年後を目指す「トビチ商店街構想」は、○と編集社の赤羽

と奥田が以前から温めていた構想であり、世に出るタイミングを待っていた。その頃、私は会社を辞め辰野町に来たものの、「社会の肩書き」を失った自分に自信を失っていた。朝起きる時間から、一週間全部のスケジュールを自分で全て決めなくてはいけないなんて……。会社員時代は無意識にこなしていたが、考えなくてはいけないことがたくさんあった。とはいえ、時間もエネルギーも持て余している私に、トビチマーケットの「プロジェクトマネージャー」というカッコいい響きの役割が舞い降りて来た。

予算確保、出店店舗さんへの依頼、空き地・空き店舗オーナーさんの調整、空き店舗片付け、一緒にプロジェクトを支えてくれる仲間探し：やることは山積みで、限られた人員と予算の中で、全てが同時進行だった。「10年後の日常」を言葉にして、「この指止まれ方式」の仲間集めで、お金がなかったら、自分たちで作ってしまえばいい。メンバーの多くが働き盛りの人々で、建築士、デザイナー、自転車冒険家、掃除のプロ、大工、学生、印刷のプロ、看護師、車整備士、会社の営業、事務、はちみつ屋さん：お困りごとをみんなに共有すると、得意な人がいとも簡単にそれをこなしてしまう。まちには色々な人がいて、その人たちとビジョンで繋がったチームって、なんて心強いんだろうか。

地域には関われる余白がたくさんある。トビチマーケットに関しても、やるべきことを並べ、それぞれが主役になる役割を見つけてもらい、余った仕事やめんどくさいことは運営側のこちらでやる。それが○と編集社のスタイルだった。（とは言いつつ、ほとんど皆さんが役割を持ってくれたので、自分が何をやっていったのか、もはや思い出せない。）

目に見えない何かのせいでお腹を壊し始めて（緊張か？）、早1ヶ月。12月7日のトビチマーケット当日、私はテンパっていた。まずいぞ、あれもこれも足りない。会場の四方八方から連絡があり、画面がバリバリに割れているiPhoneが鳴り止まない。恐らく白目になっていたのだと思う。周りにいたチームのみんながこれ持ってきますね！などと気を遣って声をかけてくれ、色々が進んだ。だが、開催時刻が過ぎても、私は全く事務所から出られない。

トークイベント会場で自主的に行動してくれていた、ボヘミアンコーヒーのヒロくん、イベント開始後、とうとう電話だけでは対応しきれない私に、直接会いに来てくれた。とても引きつった顔をしていて、怒っているようだ。「ヒロくん、本当にごめん私」と話しかけると、「ミサさん、俺やばいっす。人が…外に人がたくさん歩いています。」と言って涙を流し始めた。

その一言で事務所の窓に駆け寄った。ずっと詰所状態で、外を見れていなかったが、そこにはベビーカーを押した家族づれや、仲よさそうに歩く年配のご夫婦まで、たくさんの人々が楽しそうにまちを歩いている。夢かと思い、窓を閉めて、もう一度開けてみる。「ヒロくん、本当だね、人がたくさん歩いているね！」

まちに人が歩いているのを見て、涙を流したり、感動したりする。今まで生きて来た中で、そんなことあっただろうか。少なくとも、辰野町にくるまではなかったと思う。下辰野商店街を歩いている人たちは、自

分たちがその感動の光景をつくり出しているなんて気づきもしない様子で、お買い物や会話を楽しんでいた。

会場の一つ一つには、手作りのスタンプが置かれ、駐車場にはおしゃれな看板が置かれていた。夜な夜な一人で格闘していた、建築士ジンコさんの手仕事である。もう時間がない、お金がない、そんな気持ちになっても絶対に諦めなかった。トビチマーケットの会場細部の至る所にジコが宿っていた。

またトビチマーケットに全国から出店してくれた店舗さんたちだが、初めてのイベントということもあり「トビチのビジョンに共感して参加したが、正直、売り上げは期待していなかった」という。だが終了後、感触を聞いてみると悪くなかったようだ。すぐに完売してしまったので、もっと仕込んでくればよかったよ、なんて声も。では、地元の老舗のお店さんたちはどうだろうか。いつもお世話になっている神田食堂さんなんて2階まで満員だったというし、それぞれ独自に企画した、靴のフジタやさんのクジや、たかだや花園さんの花クジもほとんど売り切れたという。嬉しいなあ…。

イベント終了後は、通常ゴミ拾いをする人が多いと思うが、今回まちに来てくれた人たちは、ゴミを落としていかず、私たちは、ゴミ拾いをする必要がなかった。あくまでも、彼らにとっても日常の延長だったのだ。そんなこの日常を10年後（もう9年後）まで紡がなくてはなあ。未来にワクワクしながら、また妄想の日々が始まるのだ。

おわりに

10年後、僕たちが暮らしや仕事で関わっていく商店街や地域って
どんな風になったら、僕たちが今より少し面白くそして楽しく暮らせるかな！？
おしゃれで素敵なカフェ、ご飯屋さん、パン屋さん、スイーツ屋さん、バー、
本屋さん、雑貨屋さん、家具屋さん、カバン屋さん、靴屋さん、洋服屋さん、
ゲストハウス、ライブハウス、イベントや楽しいことができる
多くの人が集まれる場所などなどあったらいいかな。
自転車や歩いて巡れる距離感で、自分たちが素敵で楽しいお気に入りの場所。
こだわりの昔からのお店や素敵な新しいお店があったらワクワクするよね。
今ある空き家や空き店舗、空き地に転々と。
目に止まる範囲にあればきっとまちを歩いて楽しいよね。
商店街の持っている普遍的で根本的な良さはめぐって楽しいってことで、
別に全部のシャッターが開いていなくてもいいよね。
しまっているお店の隣に新しいお店があったらより新しいお店が生えるし。
そう考えると、しまっているお店、昔からのお店、新しいお店、そこに訪れる人、
みんなに優しい空間が広がっている感じいいね。
ショッピングストリートじゃなくて誰にも優しいコミュニティーストリートだ。

そんな未来の姿ってなんて呼んだらいいのかな？

転々と。

飛び地状態で。

それ、そのままでもいいじゃない

トビチ商店街

お酒を飲みながらワクワクするような姿を妄想する
一晩のやり取りとからスタートした小さな僕たちの未来のお話。

それが、トビチ商店街です。

確かにそんな日常になったら確かに楽しいよね。

いいよねって多くの人とビジョンを共有することができたら。

そんな商店街や地域になるなら僕も私って。

じゃ10年後のトビチ商店街を前借りして、みんなで体験しちゃおうよ。

同じ体験を通して、イメージを共有し、より多くの人々と共感する。

それ、本当にできたらワクワクするね。

2019年12月7日（日）

共感の輪が漂う雰囲気、下辰野商店街がトビチ商店街となった

トビチ market は、僕たちが見たい商店街の始まりの一日。

あの日の景色を僕たちは忘れない。

だって10年後の未来のワクワクする一日を体験してしまったから。